

コミュニケーションの視点から見たバフチン論

- 『バフチン言語論入門』書評として -

ミハイル・バフチン著 桑野隆・小林潔編訳

『バフチン言語論入門』(せりか書房、2002年) [ISBN4-7967-0242-3]

黒崎 岳大

ロシア・東欧地域の文芸理論家や哲学思想家は、多くの場合西欧諸国に紹介されるまでに幾ばくかのタイム・スパンが置かれる傾向にある。ロシアの文豪ドストエフスキーやトルストイはその代表であり、レヴィ-ストロースの構造主義にも影響を与えたとされる文学研究者・民俗学者ウラジーミル・プロップも、1950年代になりアラン・ダンダスなどのアメリカの民俗学者によって評価されるようになってきている。しかしながら、この点に関して日本は西欧諸国と比較して、やや独自の有利性を持っている部分がある。明治時代の二葉亭四迷以来、優秀なロシア翻訳者を学問世界に供給し続けていった結果、西欧世界の言語(とりわけ英語)を通過せずに、ロシアの研究者たちの思想を直輸入する機会を得てきたことである。そのことに関して、アメリカから来た研究者が日本の文学研究者たちが卓越したロシア思想に関する知識を持っていることを評して、「日本人はロシア語教育の充実ゆえに英語教育が進まなかった」と言ったエピソードも伝えられている。

さて、このバフチンという人物も上記のような研究者として語られる機会の多い人物である。彼の活躍した1920年代から30年代は、モスクワ中心としたフォルマリズムの名の下に多くの記号論に関する研究が花開いた時期である。しかし、これらの成果が西欧のアカデミズムの俎上にのせられるのは、それから30年以上も後になってからである。評者の研究分野である文化人類学の分野では更に遅れ、ここ10年ほどになり、ようやく近年「ポリフォニー」という概念の中で注目されるようになってきている。しかしながら、我国の中でも、ロシア文学者たち

の間ではいち早く、バフチン及び彼の弟子たちによって示された思想について大いに論議する可能性があることを指摘している。この場合、文化人類学や社会学などで注目されてきたバフチン論が、西欧（とりわけアメリカ）からのフィルターを通じて伝えられたのに対して、日本のロシア文学者によって検討されているバフチン論は、ロシア語から直接翻訳されてきた成果によるところが多い。ここで言語の翻訳による研究成果の違いについて比較検討するつもりはない。しかし、ここで重要なのは、本文で紹介する『バフチン言語論入門』（ミハイル・バフチン著 桑野隆・小林潔編訳 せりか書房 2002）が、文化人類学や社会学でよく行われる、バフチン自身の思想を語る以上に西欧思想に固められた「バフチン論」の下で検討されている研究書とは違い、バフチン及び彼の弟子たちが母語で書いた論文を翻訳することで、本書を通じて読者に直接の「バフチン論」を提供しうる作品として成り立たせることができた点にある。本書の訳者である桑野隆氏は現在日本でバフチン論を広範に展開できる代表的な研究者であり、また小林潔氏も数少ないロシア文学を理論面から詳細に検討できる若手ロシア研究者である。二人によって編訳されたこの作品を、評者はあえて現在の社会学や文化人類学の中で語られる言葉で読み直しながら、『バフチン言語論入門』の面白さをもう一度吟味したいと思う。

本書は、「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉 - 社会学的詩学の問題によせて」、「西欧における最新言語学思潮」、「芸術のことばの文体論」の三部で構成されている。前者二部の訳を桑野が担当し、最後の三部目を小林が担当している。ただし、小林の担当した三部目は三つの論文を一つにしたものとして考えられるので、事実上は五論文から成り立っているといえるだろう。

本書を読む中で評者が最初に読み替えてみる努力をしたのが、バフチンが持論を展開する中でキーワードとして登場させている「社会学的」という言葉である。この言葉を、評者は「コミュニケーション」という言葉に代えて読み直してみると、これまでの社会学者や文化人類学者（とりわけ言語人類学者）が述べようとしてきた考え方に一致してくるように思われる。と同時に、本書で展開されたバフチン言語論に対する批判点も明らかにしていくことができるようだ。

「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」では、まさに「社会学的」という言葉を「コミュニケーション」という言葉に読み替えることができるだろう。芸術作品の示す美的なものを作品の素材や創作者や観照者の個人心理という部分を通じて全体を見出そうとすることを批判し、「芸術作品のなかにとどめられた、創作者と観照者の相互関係の特殊な関係」(14 ページ)として考えている。この考え方は、ソシュールやヤコブソンが示そうとした言語コミュニケーションの図式と一致している。さらにイントネーションの例を用いながら、バフチンも言葉を社会学的視点、つまりコミュニケーションの視点から捉えるときに言語内の意味と同時に、言語外のコンテクストも重要な要因として働いていることを示している。こうした視点は今日の主流の言語コミュニケーションモデルと一致した考え方である。

「西欧における最新言語学思潮」では、「西欧における現代言語哲学の基本的潮流の特徴を明らかにする」(55 ページ)という課題のもとで、二つの言語学における主な潮流を比較しながら論を進めている。すなわち、前者は発話者の言語的嗜好を重んじた「個人主義的主観論」であり、後者は話し手よりも了解者の観点を優先する「抽象的客観論」である。「バフチン言語論」では、両者の代表的な研究者の考え方をあげながら論を展開し、最終的には「言語とは、話し手たちの社会的な言語的相互作用によって実現される絶え間ない生成過程である」(94 ページ)という考え方を出している。このように従来 of 言語哲学の主流を「個別主義的主観論」と「抽象的客観論」という二つの軸に分けて論を明確に進めながら、その両者の問題点を下に「社会学的」というコミュニケーションの視点からみた持論を展開していく姿勢は見事である。

「芸術のことばの文体論」は、「第 章 言語とはなにか」、「第 章 発話の構成」、「第 章 言葉とその社会的機能」からなっている。「言語とはなにか」では、言語の成立と発達過程について、社会生活との相互作用の中で変容し展開して言ったことを述べている。言語は、それが用いられることで周囲のイデオロギーの諸体系を成立させていくと同時に、個人の意識という内面の構築にも影響を与えていく。そして言語が作用するどちらの場合でも、常に他者を意識して成立しているという意味で社会学的な研究の重要性を述べている。言語の成立というタブー

視されやすいテーマを持論のコミュニケーションの視点から明確に説明する姿勢は賞賛に値するだろう。

「発話の構成」では、第 4 章で明らかにしてきた言語の社会的本性を詳細に考察している。ここにおいても言語の本質は、聞き手の存在を前提においた対話的な「ことばによる相互作用という - ひとつもしくは多くの発話によって実現される - 出来事」(138~9 ページ)としている。この場合の聞き手も実際に現前している人物に止まらず、語り手の内側に流れている内奥の声にまで拡大させている。こうして個々の発話は常に対話的であり、コミュニケーション作用の下で成立させていることを示している。そして発話の意味はその発話の行われているシチュエーションとそれに伴う形式から成り立っていることを示している。ゴゴリの『死せる魂』を利用しながらの持論の説明は、強引な展開と思われるところもあるものの、説得力を与えるのに効果的であった。

「言葉とその社会的機能」では、さらに言語から言葉に視点を移している。本章では、特に言葉のなかにあるイデオロギー的現象に着目し、それに伴う現実を反映させる部分と、生きた言語的相互作用の中で屈折していくという、背反する二面性を示した。とりわけ本章の下となった論文は連載として発表されたものであり、ここで用いられている具体例は、訳者も指摘しているが、今日的視点から検討してもさらに注目すべくところが多く見出せるだろう。ただし本章におけるキーワードの一つともいえる言葉の屈折を生み出すことになった「階級闘争」などの用語の使用には、バフチンの活躍したソビエト連邦成立時代と言う社会背景を酌む必要はあるものの、相互作用というコミュニケーション行為の中で生じて新たに構築され続けている意味として把握すれば今日においても十分理解できる考え方である。

評者としても言語コミュニケーションを研究対象としている立場から見て、1930 年代にこのようなコミュニケーション理論に基づいた言語芸術の分析が進められていたことに驚きをもつとともに、この考え方を一般的な文化論にまで視野を広げて考えようとしていた研究姿勢に敬意を示さざるを得ない。ただし、一点だけあえて疑問を呈するとするならば、「バフチン言語論」では、創作者と観照者はあるコミュニケーション行為が成立する場合に、言語外のコンテクストの一致性を求めて

いる。しかしながら、評者が考えるに実際のコミュニケーションの場では、果たしてこのように両者が常に一致した言語外コンテキストを共有しているという前提を設けることにいささか疑わしさを覚えざるを得ない。むしろ両者の間では、(一致させようと努力はされるものの)多くの場合は誤解などのミスコミュニケーションが生じてしまっている。むしろ創作者も観照者も互いが相手の意図を読み取ろうとして努力しているのが、実際の言語コミュニケーションの場であると考えの方が適切ではないかと思われる。

こうした問題を指摘できるのも、本書を翻訳された訳者両氏の良質な翻訳のおかげといっても過言ではないだろう。特に小林の翻訳は同僚としてその仕事振りを間近で見えていたこともあるが、バフチンの特有の表現を常に原文と対照させながら翻訳を続け、推敲に際しては数多くの研究者の厳しい批判の眼を通し、日本語としても適切な表現となるよう心がけてきた。その結果、多くの翻訳書に見られる「訳書ゆえの悪文」という部分は限りなく排除されている。こうした地道な作業が良質な翻訳という枠を超えて、バフチンの言語論を生き生きと語らせる作品の域にまで達することを可能にしたのではないだろうか。

それにしても広大なロシアの大地には、まだ多くの興味深い理論や思想が眠っているかもしれないと思うと、評者も興奮しないではいられない。今後も本書の翻訳者両氏による精力的な研究・翻訳活動を通じて、多くの埋もれた「宝」が発見され続けていくことを期待して止まない。

(くろさき たけひろ)